

杜甫詩文集の形成に関する文献学的研究

長谷部, 剛

<https://hdl.handle.net/2324/2534519>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (文学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏名	長谷部 剛				
論文名	杜甫詩文集の形成に関する文献学的研究				
論文調査委員	主査	九州大学	教授	静永 健	
	副査	九州大学	講師	井口 千雪	
	副査	九州大学	教授	辛島 正雄	
	副査	九州大学	准教授	川平 敏文	
	副査	専修大学	教授	松原 朗	

論文審査の結果の要旨

現在、中国の古典研究、すなわち中国古典を素材として考察を深めてゆく幾つかの研究分野は、きわめて憂慮すべき状況下にある。「今どき李白や杜甫をやってももう何も生み出さないのでは…」などという軽率な誤解に基づく談話が、ある大学の文系教員から公然と発せられたという。勿論その某教授の立場に立って考えれば、李白や杜甫、白居易などの中国唐代の詩人の作品は、すでに幾種類もの日本語全訳本が出版されており、これらを研究する余地はもはや限定的、局所的なものであって、今後はいまだ注目されていない他の時代をのびやかに開拓し、さらに難解な作品研究に進むべきだとの激励の意味も含んでいたかもしれない。しかし、こと中国古典学に関しては、もう一つの大きな、そして険峻な研究領域があることを忘れてはいけない。

中国の詩人として圧倒的な知名度をもち、つとに「詩聖」の称号をもつ杜甫（712～770）であるが、その作品の原拠となる詩文集『杜工部集』については、その成立について多くの未解明な部分が残っている。まず安祿山の乱（756年長安陥落）とその後の社会情勢の混迷によって離職、漂泊を余儀なくされた杜甫とその家族たちであるが、かかる窮乏生活の中で、いったいどのように彼の作品は書き留められ伝承されたのかという本質的な問題がある。最も象徴的な事実を述べれば、流寓先の湖南省で没した彼の遺体は、中国の伝統的な考えに従って故郷河南省への埋葬が求められたが、その実現は没後四十三年を経た孫の代であった。しかし杜甫の詩歌はいち早く各地に伝えられ、その死没と全く同時期に潤州（現在の江蘇省鎮江市）の長官であった樊晃という人物が、杜甫詩集のダイジェスト版である『小集』（290首収録）を編んでいたことが、その序文等によって判明している。唐代、いまだ詩文集を「印刷」という習慣は芽生えていない。すべて一対一の筆写本（鈔本）による流通であり、その当時の杜甫詩集の原本は、いまだ発見されていないが、それらがいったいどのように伝えられ、今日の『杜工部集』（詩歌のみでも約1450首）に集成されていったのかという問題は、実は日本および本国中国においても、本格的かつ実証的な研究が十分に進められていないのが現状であった。このたびの申請者長谷部剛氏の本論文は、この問題に真正面から取り組み、一首一首の作品、さらにはその一字一句の文字異同データを丹念に整理し、多くの新しい事実を解明し、また今後解明が待たれる幾つかの推論を提出している。特に杜甫在世時の「詩集」が、その後半生の流寓地（成都、夔州、湖南など）に従って幾度か自己編集されていて、それが現在の作品の著しい文字異同の原因となっているのではないかという指摘は、最も珍重すべき発見である。ところで、この綿密詳細な分析方法の実践こそが、中国古典研究の醍醐味であって、中国清朝に開

花した考証学（訓詁学・音韻学・書誌文献学）や、これを更に発展させヨーロッパの分析方法をも取り入れた近代日本の内藤湖南、服部宇之吉、狩野直喜、鈴木虎雄、吉川幸次郎、長澤規矩也など先人の卓越した研究成果を懸命に熟読し咀嚼し、そのいしずえに立脚して百尺竿頭に更に一步を進めんとするものこそ、まさしく東洋学の王道に沿った成果であり、高く評価できるのである。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものと認めるものである。